

銀座

永井荷風

青空文庫

この一、二年何のかのと銀座ぎんざ界隈かいわいを通る事が多くなつた。知らず知らず自分は銀座近辺の種々なる方面の観察者になつていたのである。

唯ただ不幸にして自分は現代の政治家と交まじわらなかつたためまだ一度

もあの貸座敷然たる松本楼まつもとろうに登る機会がなかつたが、しかし交

際と称する浮世の義理は自分にも炎天にフロックコートをつけさ

せ帝国ホテルや精養軒や交詢社こうじゆんしゃの階段を昇降させた。有樂ゆうらく

座ざ帝国劇場歌舞伎座などを見物した帰りには必ず銀座のビイヤ

ホオルに休んで最終の電車のなくなるのも構わず同じ見物帰りの

友達と端はてしもなく劇評を戦わすのであつた。上野の音楽学校に開

かれる演奏会の切符を売る西洋の楽器店は、二軒とも人の知つて
いる通り銀座通りにある。新しい美術品の展覧場「吾樂」と
いうものが建築されたのは八官町の通りである。雑誌『三田
文学』を発売する書肆は築地の本願寺に近い処にある。華美な
浴衣を着た女たちが大勢、殊に夜の十二時近くなつてから、草花
を買いに出るお地藏さまの縁日は三十間堀の河岸通にあ
る。

逢うごとにいつもその悠然たる貴族的態度の美と洗鍊された江
戸風の性行とが、そぞろに蔵前の旦那衆を想像せしむる我が敬
愛する下町の俳人某子の邸宅は、団十郎の旧宅とその
広大なる庭園を隣り合せにしている。高い土塀と深い植込とに電

車の響も自おのずと遠い嵐のように軟やわらげられてしまうこの家の茶室に、
 自分は折曲しらべげて坐る足の痛さをも厭いとわず、幾いくたび度か湯のたぎる茶
 釜の調しらべを聞きながら礼儀のない現代に対する反感を休めさせた。
 建たてこ込んだ表通りの人家に遮さえぎられて、すぐ真まむかい向に立っている
 彼かの高い本願寺の屋根さえ、何処どこにあるのか分らぬような静なこ
 の辺へんの裏通には、正しい人たちの決して案内知らぬ横よこ町が幾
 筋もある。こういう横町の二階の欄干から、自分は或る雨上りの
 夏の夜よに通り過る新しんない内を呼び止めて酔すいげつ月情話じょうわを語らせて喜
 んだ事がある。また梅が散る春寒はるさむの昼過ぎ、摺すり硝子の障しょうじ子
 を閉めきつた座敷の中なかは黄昏たそがれのように薄暗く、老妓ばかりが寄
 集いっぢゆうぶしつた一中節いちちゆうぶしのさらいの会に、自分は光沢つやのない古びた音調

に、ともすれば疲れがちなる哀傷を味つた事もあつた。

しかしまた自分の不幸なるコスモポリチズムは、自分をしてそのヴェランダの外なる植込の間から、水蒸気の多い暖な冬の夜などは、夜の水と夜の月島と夜の船の影とが殊更美しく見えるメトロポオル・ホテルの食堂をも忘れさせない。世界の如何なる片隅をも我家のように楽しく談笑している外国人の中に交つて、自分ばかりは唯独り心淋しく傾けるキアンチの一場に年を追うて漸く消えかかる遠い国の思出を呼び戻す事もあつた。

銀座界限には何という事なく凡ての新しいものと古いものがあつた。一国の首都がその権勢と富貴とに自から蒐集する凡ての物は、皆ここに陳列せられてある。われわれは新しい流行の帽

子を買うためにも、遠い国から来た葡萄酒を買うためにも、無論この銀座へ来ねばならぬが、それと同時に、有楽座などで聞く事を好まない「昔」の歌をば、なりたけ「昔」らしい周囲うちの中に聞き味おうとすればやはりこの辺へんの特種な限られた場所を扱ばなければならぬ。

自分は折々てんがどう天下堂の三階の屋根裏あがに上つて都会の眺望を楽しんだ。山崎洋服店の裁縫師ちようかんずでもなく、天賞堂てんしょうどうの店員でもないわれわれが、銀座界隈の鳥瞰ちようかん図ずを楽たのしもうとすれば、この天下堂の梯子はしごだん段あがを上るのが一番軽便けいべんな手段である。茲ここまで高く上あがつて見ると、東京の市街も下にいて見るほどに汚らしくはない。十

月頃の晴れた空の下したに一望つく尽る処なき瓦屋根の海を見れば、やたらに突立っている電柱の丸太の浅間しさに呆あきれながら、とにかく東京は大きな都会であるという事を感じ得るのである。

人家の屋根の上をば山手線やまのてせんの電車かすみが通る。それを越して霞ヶ関せき、日比谷ひびや、丸の内まるのうちを見晴す景色と、芝公園しばこうえんの森しながに対して品川しわざわん湾わんの一部と、また眼の下なる汐留しおどめの堀割ほりわりから引続いて、

お浜御殿はまごてんの深い木立こだちと城門ぎやうもんの白壁を望む景色とは、季節や時間ぐあいの工合ぐあいによつては、随分見飽きないほどに美しい事がある。

遠くの眺望から眼を転じて、直ぐ真下まっしたの街を見下すと、銀座の表通りと並行して、幾筋かの裏町は高さの揃った屋根と屋根との間を真直に貫き走っている。どの家にも必ず付いている物干ものほし

台だいが、小ちいな菓子折さでも並なべたように見え、干かしてある赤あかい布ぬいや
 並なべた鉢物ひつものの緑みどりりが、光線くわせんの軟やわな薄曇うすくもの昼過ひるぎなどには、汚よごれた
 屋根やねと壁かべとの間に驚おどろくほど鮮あざかな色彩しきさいを輝かがかす。物干台ものほしだいから家うちの
 中なかに這はい入いるべき窓まどの障しょう子じが開あいている折まには、自分おれは自由じゆうに二
 階かの座敷ざしきでは人ひとが何なにをしていいるかを見透みすかす。女おんなが肩肌かたはだぬ抜きで化
 粧けいをしていいる様ようやら、狭せまい勝手口かたてぐちの溝板どぶいたの上うへで行ぎよう水ずいを使つかっ
 ていいるさままでを、すすつかり見下みくだしてしましまう事ことがある。尤もつとも日本にっぽん
 の女おんなが外そとから見えみえる処ところで行水でいすいをつかうのは、『阿菊あぐきさん』
 の著者しやくしやを驚喜きんぎせしめた大事件だいじけんであるが、これはわざわざ天下堂てんかどうの
 屋根裏やねうらに登のぼらずとも、自分おれは山やまの手ての垣根道かきねみちで度々たびたび出遇であつてびつ
 くりしていいるのである。この事ことを進すすめていいえば、これまで種々しゆしゆな

る方面の人から論じ出された日本の家屋と国民性の問題を繰返すに過ぎまい。

われわれの生活は遠からず西洋のように、殊に亜米利加アメリカの都会のように変化するものたる事は誰たが眼にも直ちに想像される事である。然らばこの問題を逆にして試こころみに東京の外観が遠からずして全く改革された暁あかつきには、如何なる方面、如何なる隠れた処に、旧日本の旧態が残されるかを想像して見るのも、皮肉な観察者には興味のないことではあるまい。实例は帝国劇場の建築だけが純西洋風に出來上りながら、いつの間にかその大理石の柱のかけには旧芝居の名残りなごなる簪屋かんざしやだの飲食店などが発生繁殖して、遂に嚴肅なる劇場の体面を保たせないようにしてしまった。銀座の

商店の改良と銀座の街の敷石とは、将来如何なる進化の道によつて、浴衣ゆかたに兵児帯へこおびをしめた夕涼ゆうすずみの人の姿と、唐傘からかさに高足たかあし駄だを穿はいた通行人との調和を取るに至るであろうか。交詢社こうじゆんしゃの広間ひろまに行くと、希臘風ギリシヤふうの人物を描いた「神の森」ボアサクレエの壁画びやくの下もとに、五ツ紋いつもんの紳士しんしや替り地かわじのフロックコオトを着た紳士が幾組いくずとなく対座して、囲碁仙集いごせんしゆうをやっている。高い金箔きんぱくの天井てんじやうにパチリパチリと響き渡る碁石の音は、廊下を隔てた向うの室むろから聞えて来る玉突のキュウの音まじに交わる。初めてこの光景に接した時自分は無論いふべからざる奇異なる感に打たれた。そしてこの奇異なる感は、如何なる理由によつて呼起されたかを深く考え味わねばならなかつた。数寄すきを凝こらした純江戸式の料理屋の小座敷

には、活版屋の仕事場と同じように白い笠のついた電燈が天井からぶらさがっているばかりか遂には電気仕掛けの扇風器までが輸入された。要するに現代の生活においては凡ての固有純粹なるものは、東西の差別なく、互に噛み合い壊し合いしているのである。異人種間の混血児は特別なる注意の下に養育されない限り、その性情は概して両人種の欠点のみを遺伝するものだというのが、現代の生活は正しくかくの如きものである。

銀座界限はいうまでもなく日本中で最もハイカラな場所であるが、しかしここに一層皮肉な贅沢屋があつて、もし西洋そのままの西洋料理を味おうとしたなら銀座界限の如何なる西洋料理屋もその目的には不適當なる事を発見するであろう。銀座の文明と横

浜のホテルとの間には歴然たる区別がある。そして横浜と印度インドの殖民地と西洋との間にはまた梯子はしご昇りに階段がついている。

ここにおいて、或る人は、帝国ホテルの西洋料理よりもむしろ露店の立ち喰いにトンカツの噉おくびをかぎたいといった。露店で食くらう豚の肉の油揚げは、既に西洋趣味を脱却して、しかも従来てんの天麩羅ぶらと牴てい触しよくする事なく、更に別種の新しきものになり得ているからだ。カステラや鴨かも南蛮なんばんが長崎を経て内地に進み入り、遂に渾こん然ぜんたる日本のものになったと同一の実例であろう。

自分はいつも人力車じんりきしゃと牛鍋ぎゆうなべとを、明治時代が西洋から輸入して作ったものの中うちで一番成功したものと信じている。敢あえて時間ごじんの経過が今日の吾人ごじんをして人力車と牛鍋とに反感を抱かしめな

いのでは決してない。牛鍋の妙味は「鍋」という従来の古い形式の中に「牛肉」という新しい内容を収めさせた処にある。人力車は玩具おもちゃのように小くちいさ、何処となく滑稽な形をなし最初から日本の生活に適当し調和するように発明されたものである。この二つはそのままの輸入でもなく無意味な模倣でもない。少くとも発明という賛辞に価するだけに発明者の苦心と創造力が現われている。即ち国民性を通過して然る後に現れ出たものである。

こういう点から見て、自分は維新前後における西洋文明の輸入には、甚だ敬服すべきものが多いように思っている。徳川幕府がフランスの士官を招しょうへい聘へいして練習させた歩兵の服装——陣笠じんがさに筒袖つつそでの打割羽織ぶつさきばおり、それに昔のままの大小をさした服装いでたちは、

純粹の洋服となつた今日の軍服よりも、胴が長く足の曲つた日本人には遥かに能く適当よしていた。洋装の軍服を着れば如何なる名将といえども、威儀風采において日本人は到底西洋の下士官スウゾフにも肩を比する事は出来ない。異ちがつた人種はよろしく、その容貌体格習慣拳動の凡てを鑑かんみて、一樣には論じられない特種うえのものを造り出すだけの苦心と勇氣とを要する。自分は上野の戦争の絵を見る度たびに、官軍の冠かむつた紅白の毛けかぶ甲とを美しいものだと思ひ、そしてナポレオン帝政当時の胸きようこうきへい甲かぶ騎と兵かぶの甲とを連想する。

銀座の表通りを去つて、いわゆる金春こんばるの横よこちよう町とを歩み、両側ともに今では古びて薄暗くなつた煉瓦れんがづく造りの長屋を見ると、

自分はやはり明治初年における西洋文明輸入の当時を懐しく思返すのである。説明するまでもなく金春の煉瓦造りは、土蔵のように壁塗りになっていて、赤い煉瓦の生地きじを露出させてはいない。家の軒はいずれも長く突き出いで円まるい柱に支えられている。今日ではこのアアチの下をば無用の空地くうちにして置くだけの余裕がなくなつて、戸々ここ勝手かにこれを改造しあるいは破壊してしまった。しかし当初この煉瓦造を経営した建築者の理想は家並やなみの高さを一致させた上に、家ごとの軒の半円形と円柱との列によつて、丁度リボリの街路を見るように、美しいアルカアドの眺めを作らせるつもりであつたに違ちがひない。二、三十年前ぜんの風流才子は南国風なあの石の柱と軒の弓形アーチとがその蔭なる江戸生きつすい粋この格子戸こうしどと御神燈ごしんとう

とに對して、如何に不思議な新しい調和を作り出したかを必ず知っていた事であろう。

明治の初年は一方において西洋文明を丁寧輸入し綺麗に模倣し正直に工風くふうを凝こらした時代である。と同時に、一方においては、徳川幕府の圧迫を脱した江戸芸術の残りの花が、目覚めざましくも一時に二度目の春を見せた時代である。劇壇において芝翫しかん、彦三郎ひこさぶろう、田たのすけ之助の名を挙げ得ると共に文学には黙阿弥もくあみ、魯文ろぶん、柳りゅうほく北きたの如き才人が現れ、画界には暁ぎょうさい斎さいや芳年よしとしの名が轟とどろき渡つた。境さかいがわ川かわや陣幕じんまくの如き相撲すもうはその後ごには一人もない。円朝えんちようののち後に円朝は出なかつた。吉原よしわらは大江戸の昔よりも更に一層の繁栄を極め、金瓶きんぺいだいこく大黒だいこくの三名妓の噂いっせが一世の語り草となつた。

位である。

両国橋には不朽なる浮世絵の背景がある。柳やなぎばし橋はしは動しがた
い伝説の権威を背負せおっている。それに対して自分は艶なまめかしい意味
においてしん橋の名を思出す時には、いつも明治の初年返かえりざ咲さき
した第二の江戸を追想せねばならぬ。無論、実際よりもなお麗うるわし
くなお立派なものにして憬慕けいぼするのである。

現代の日本ほど時間の早く経過する国が世界中にあらうか。今
過ぎ去ったばかりの昨日きのうの事をも全く異ちがった時代のように回想し
なければならぬ事が沢山にある。有楽座を日本唯一の新しい西洋
式の劇場として眺めたのも僅に二、三年間の事に過ぎなかつた。

われわれが新橋のていしやじょう停車場を別れの場所、出発の場所として描写するのも、また僅々四、五年間の事であろう。

今では日吉町ひよしちようにプランタンが出来たし、尾張町おわりちようの角かどにはカフェエ・ギンザが出来かかっている。また若い文学者間には有名なメイゾン・コオノスこあみちようが小網町こあみちようの河岸かしどお通りを去って、銀座附近に出て来るのも近い中うちだとかいう噂がある。しかしそういう適当な休み場所がまだ出来なかつた去年頃まで、自分は友達を待ち合わしたり、あるいは散歩の疲れた足を休めたり、または単ゆきぎに往來えらの人の混雑を眺めるためには、新橋停車場内の待合所えらを択ぶがよいと思つていた。

その頃には銀座界限には、已にカフェエや喫茶店やビイヤホオ

ルや新聞縦覧所などという名前をつけた飲食店は幾軒もあつた。けれども、それらはいずれも自分の目的には適しない。一時間ばかりも足を休めて友達とゆつくり話をしようとするには、これまでの習慣で、非常に多く物を食わねばならぬ。ビール一杯が長くて十五分間、その店のお客たる資格を作るものとすれば、一時間に対して飲めない口にもなお四杯の満まんを引かねばならない。然らずば何となく気が急せいて、出て行けがしにされるような僻ひがみが起つて、どうしても長く腰を落ち付けている事が出来ない。

これに反して停車場内の待合所は、最も自由で最も居心地よく、聊いささかかの気兼きがねもいらぬ無類上等の「Cafe」《カフェエ》である。耳の遠い髪かみの臭い薄ぼんやりした女ボオおんなイに、義理一遍のビ

イルや紅茶を命ずる面倒もなく、一円札に対する剩つりせん錢を五分もかかつて持もつて来るのに気をいら立てる必要もなく、這はい入りたいた時に勝手に這入はいつて、出たい時には勝手に出られる。自分は山の手せつの書齋の沈静した空氣が、時には余りに切せつなく自分に対して、休まずに勉強しろ、早く立派なものを書け、むつかしい本を読めというように、心を鞭打むちつ如く感じさせる折には、なりたけ読みやすい本を手にして、この待合所の大きな皮かわ張はりの椅子いすに腰をかけるのであつた。冬には暖い火が焚たいてある。夜よるは明い燈ともしび火が輝きらいている。そしてこの広い一室なかの中にはあらゆる階級の男女が、時としてはその波瀾ある生涯の一端を傍觀させてくれる事すらある。Henri 《アンリイ》 Bordeaux 《ボルドオ》 という人の或る旅

行記の序文に、手荷物を停車場に預けて置いたまま、汽車の汽笛の聞える附近の宿屋に寝泊りして、毎日の食事さえも停車場内の料理屋で準備、ととの何時なんどきにても直様すぐさま出発し得られるような境遇に身を置きながら、一向に巴里パリを離れず、かえつて旅人のような心持で巴里の町々を彷徨ほうこうしている男の話が書いてある。新橋の待合所にぼんやり腰をかけて、いそが急しそうな下駄の響と鋭い汽笛の声を聞いていると、いながらにして旅に出たような、自由な淋しいいい心持がする。上田敏先生うえだびんもいつぞや上京された時自分に向つて、京都の住いすまもいわば旅である。東京の宿も今では旅である。こうして歩いているのは好い心持だといわれた事がある。

自分は動いている生活の物音なごの中に、淋しい心持を漂ただよわせるた

め、駐車場の待合室に腰をかける機会の多い事を望んでいる。何のために茲こゝに来るのかと馱夫に訊問された時の用意にと自分は見送りの入場券か品川行の切符を無益に買い込む事を辞さないのである。

再びいう日本の十年間は西洋の一世紀にも相当する。三十間堀かしどおりの河岸通には昔の船宿が二、三軒残っている。自分はそれらの家の広い店先の障子を見ると、母がまだ娘であった時分この辺へんから猿若町ざるわかちようの芝居見物に行くには、猪牙船ちよきぶねに重詰じゅうづめの食事まで用意して、堀割から堀割をつたわって行ったとかいわれた話をば、いかにも遠い時代の夢物語のように思い返す。自分がそも

そも最初に深川の方面へ出掛けて行ったのもやはりこの汐留しおどめの石橋いしばしの下から出発する小な石油ちいさの蒸汽船に乗ったのであるが、それすら今では既に既に消滅してしまつた時代の逸話となつた。

銀座と銀座の界限とはこれから先も一日一日と變つて行くであらう。丁度活動写真を見詰める子供のように、自分は休みなく變つて行く時勢の絵巻物をば眼の痛いたくなるまで見詰めていたい。

明治四十四年七月

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 一」岩波書店

1981（昭和56）年11月17日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀座

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>